

独歩「田家文学とは何ぞ」に対する一考察

——蘇峰文学論の受容を視座に——

曲 莉

一

明治二十五年六月八日⁽¹⁾、弟収二を伴って再度上京した独歩は、青年文学会機関誌『青年文学』の編集に携わり、同時に「鐵斧生」の署名で七月十五日の同誌九号に「書林に向ひての二注文」を寄せ、これを初めとして、以後、翌二十六年三月に廃刊となる第十七号まで、毎号欠かさずに執筆している。

「田家文学とは何ぞ」(明25・11・15)はその期間中に同誌に発表した評論文の一つである。ワーズワース詩集の入手直後にこの文章が発表された事実があったため、従来、そこに引用されているジョン・モーレーらの言葉の原典の考証を手がかりに、独歩が入手したワーズワース詩集は何

かをめぐって議論が進められてきた。が、その一方で、「習作⁽²⁾」という認識もあつてか、独歩がワーズワースを手引きにして唱えていた「田家文学」の様相の具体を含め、文中の叙述に即した細部の検討は必ずしも十分に行われているとはいえない。

この文章で独歩は自身最初のワーズワース観を開陳しているが、ワーズワース詩集の入手と近接するがゆえに、「彼自身のワーズワース観が現はれて来てゐる⁽³⁾」という見方に典型されるように、これを詩集との出会いによって触発された、独歩独自のワーズワース観の表出と見る見解がある。

近年になり、独歩が「田家文学とは何ぞ」において、徳富蘇峰が「平民の詩人」(『国民新聞』明25・10・23)に引いているのと同じワーズワースの詩句を用いている事実が秦

行正によって指摘された。⁽⁴⁾氏は、「独歩のワーズワズ憧憬」の背景に「蘇峰の「新日本の詩人」以来のワーズワズ紹介」があったことへの注意を促がしたのである。文章全体の位置づけについて、「ワーズワズの受容によって形成された田家文学の主張」、あるいは「直截に西欧的なワーズワズの自然観・文学観を移入した結果の所産」とあるように、基本的には従来の方を見方を基盤にしつつ、「田家文学とは何ぞ」の執筆の背景に蘇峰の影響を看取した点は、はなはだ示唆深いものである。

「田家文学とは何ぞ」には、ワーズワズ自らの言葉を用いて彼の詩人としての特徴を語った、原詩の引用が二箇所見られる。

(前略) 彼は自ら曰く、

“The moving accident is not my trade;

To freeze the blood I have no ready arts;

’Tis my delight alone in summer shade,

To pipe a simple song for thinking hearts.”

以て渠の自立する所、頼む所、任ずる所を闊ふに足る而して渠の詩眼は何者に向て注がれしか。渠の詩あり曰く、

“Love had he found in huts where poor men lie;

His daily teachers had been woods and hills,

The silence that is in the starry sky,

The sleep that is among the lonely hills.”

則ちウォルズウォルスに取りては帝位、戦争、地獄、天堂よりも賤が伏屋、谷の小がわ、森、或は岳陵の方、意味深か、りしなり(後略)。(全集第一巻、二一〇頁)

すでに山田博光の指摘した通り、⁽⁵⁾右に掲げた英詩は、それぞれ「鹿跳びの泉」(Hart-Leap Well)と「ブルーム城の祝宴での詩」(Song at the Feast of Brougham Castle)の中の一節である。

このうち、「ブルーム城の祝宴での詩」の冒頭の“Love had he found in huts where poor men lie”は秦行正の注目する詩句でもある。⁽⁶⁾蘇峰が「平民の詩人」の結語に「賤が伏屋に、彼は愛を見出しぬ」と日本語訳を付して、それを引用しているからである。「田家文学とは何ぞ」の中には蘇峰のワーズワズに関する言及を意識したと思われる叙述がほかにも見られる。結末近くの「路傍の野花も幾多の詩想を与へん。無限の教を供せん」という一文もそれである。

明治二十三年十一月二十三日、錦城学校で開かれた青年文学会第二回例会に森田文蔵（思軒）、徳富猪一郎、内田周平、依田百川（学海）が講師として迎えられた。その場で蘇峰は「新日本の詩人」と題する講演を行い、「ウオルツウオルスが言つた句に『道傍に咲ひて居る所のアノ無名草でも自分が涙を流すよりマダ深き所の意味がその中に籠つて居る』といふ詩がある」として、ワーズワースの詩の一句に触れているのである。⁽⁷⁾

「ウオルツウオルスが言つた句に」以下のワーズワースの言葉は、「幼時を回想して不死を知る頌」（Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood）の最後の一句を訳したものである。原詩は次の通りである。

To me the meanest flower that blows can give
Thought that do often lie too deep for tears

この句は蘇峰が好んで用いたもので、特に思い入れの深いものらしい。この講演に続き、明治二十三年四月十三日の『国民新聞』第七二号掲載の「天然と同化せよ」においても、「所謂彼のウオーツウオルスが警句の如く、無名の野花さへも、涙に余る程の深念を与るものなり。天然の人に

及ぼす勢力も亦た大ならずや」と、再度取りあげている。蘇峰の筆になるものとして、やや後になるが、明治二十六年四月三日の『国民之友』に載せられている「観察」の中には「無名の野花のみ田夫之を刈り、牧童之を踏む、唯たウオスウオスは此の中に造化の微妙を見る」とあり、自身の血肉化した言葉で語っている用例も確認することができ⁽⁸⁾。さらに、「田家文学とは何ぞ」と同じく十一月に発行された『国民之友』第百七拾壹号（明25・11・3）の「一語千金」欄は、「極メテ卑シキ花モ涙ノ届カヌ思想ヲ時トシテハ起スヲ得 ウラルツウオルス The meanest flower can sometimes produce thoughts that lie too deep for tears. — Wordsworth」と、日本語訳の後に原文を付して、この句を掲載しているのである。

民友社誌紙を耽読していた独歩のことなので、あるいはそれらの文章を通じてこの句に接していたことも推測される⁽⁹⁾。如上の幾通りかの叙述を併読すると、「路傍」「道傍」に近似する用語が使われていることから、講演のほうを参照していた可能性が高いように思われる。この講演は独歩が実際に傾聴⁽¹⁰⁾しており、くわえて、青年文学会機関誌『青年文学雑誌』（『青年文学』の前身）第一号（明24・3・6）の巻頭にはそれを速記したものが全文掲載され、更に明治二

十五年九月二十八日、青年文学会例会講演集『文談集』が青年文学社より出版され、その巻首に収められているのも蘇峰のこの講演なのである。明治二十五年九月頃は独歩が『青年文学』雑誌の主力編集陣の一人として敏腕を振っており、これらの諸事情をあわせて考えるとなおその感が強いのである。

「田家文学とは何ぞ」の一ヶ月前の同じ『青年文学』第十二号に、独歩は「民友記者徳富猪一郎氏」（明25・10・15）と題する人物評を発表していた。「国民之友は今日迄で六ヶ年八ヶ月の齢を積み、号を重ねる殆んど百七十、社説欄内に掲げられたる論文は三百七十編の多きに至る」とあるように、『国民之友』所載の蘇峰の筆になる社説を悉く通覧した気負いをうかがわせる。実際に、それに続けて発表された「田家文学とは何ぞ」に、これまで見てきたような蘇峰のワーズワース言及を意識する叙述を見出すことができるのである。

だが、果たして「田家文学とは何ぞ」は、蘇峰によるワーズワース詩句の紹介以外に彼からの影響を看取できないのだろうか。「民友記者徳富猪一郎氏」に蘇峰の文学関係論説が少なからず引用され、彼の文学論に関してある程度了解した様子がかがえる事実を考えると、なおさらこの

疑問がわき起こるのである。以下、本稿では、あらためて「田家文学とは何ぞ」の解読を試みることでこうした問題について探ってみたい。

二

「田家文学とは何ぞ」において、独歩は「渠の自立する所、頼む所、任ずる所」、そして「渠の詩眼は何者に向て注がれしか」、さらに「ウォルズウォルスが吾人に与ふる所の者は何ぞ」という三つの方面からワーズワースを論じている。なおかつジョン・モーレーらの評言を紹介して、ワーズワースの詩人としての特質を説いた後、自らのワーズワースに対して抱く所信を次のように開陳している。

只だ渠は悲劇の爲めに悲劇を作らず、小説の爲めに小説を作らず、詩歌の爲めに詩歌を作らず、美術の名の爲めに美術を作らず只だ己れの天より感得したる理想を據べて、同胞人類を教へん事を以て任じたる田家詩人たるを知るのみ。¹²⁾（全集第一巻二二二頁、傍線は引用者）

続いて、独歩は更に「近來の文学社会」を槍玉に挙げ、「没理想論の大戦争」を「意外の悲劇否な滑稽戯を見るの奇怪

なる現象」と揶揄し、湖処子もそれらの「迷信謬説」に「感染」させられたと断じ、「吾人が文学者及び文学に關して信ずる處は之れと異なる」と明言した上で、自らの見解を以下のように語っている。

渠必ずしも悲劇を作るに及ばず、必ずしも沙翁の跡を追ふに及ばず、必ずしも審美学を知るに及ばず、只だ渠は詩眼を以て『人間は如何に生活す可きか』(How to live)てふ問題に付て感得したる理想をば、詩情を以て詩文に現はし以て同胞人類を真理と善徳に導く可き使命を有する者、之れを文学者の標準と信ず。¹³⁾

(全集第一卷二二三頁、傍線は引用者)

右に掲げる二つの引用文は趣意大要が重なり、同義反復のそしりを免れないが、後者は前者を詳細な言葉でさらに明確に説明・追認したものと受け取ることができる。ここに若き独歩の文学に対する根本的な見解が表われているのではないだろうか。この場合、「理想」や「同胞人類」といった二つの言葉が共通して現われている事実は注意されなくてはならない。「理想」は文学の「内容」、「同胞人類」は「対象」、という形でいずれも文学の捉え方の根幹の問題に

かかわってくるからである。

まず、「理想」から見てみよう。後者の引用文に徴して見れば、「理想」の内実は「人間は如何に生活す可きか」(How to live)という問の解答にかかわるものであることがわかる。ここで「How to live」にあてられた「人間は如何に生活す可きか」という表現に留意しておいてよいであろう。よく似た叙述が、蘇峰「新日本の詩人」(『国民之友』明21・8・17)の結末近くの一節にもうかがわれるからである。

マシウー、アルノド氏曰く、詩の奥意は、(その表面の千態萬状なるに拘はらず)人生生活の批評にあり、詩人の偉大なるは、人生の生活に就て、即ち如何にして生活す可きやと云ふ問題に就て、最も力あり、最も美妙なる觀念を適用するに存すと、吾人は敢て此の人間生活の批評を以て、詩人全体の職分とは謂はされども、其の重なる職分たることは、即ち之れを承認せんと欲するなり、人間が如何にして生活す可きやは、人間が此の世に在つて、最初に解釈せんと欲して、最後まで殆んど解釈に苦しむ所ろの問題なり、

(傍線、波線は引用者)

先に蘇峰が「新日本の詩人」と題する講演を青年文学会例会で行なったことを述べた。内容を異にするが、二年前の明治二十一年、蘇峰の筆になる同じ題名の文章が『国民之友』に掲載されている。そこで蘇峰は伝統の旧詩を全否定する立場から、エマソンやマシュー・アーノルドらの詩学の主張を持ち上げ、そこにこそ詩人の目指すべき方向があるとし、「詩の思想」の革新を熱弁するとともに明治の新しい日本にふさわしい新詩人の出現を待望する心情を、彼独特の高揚感のある文体で表している。

引用文の「マシウー、アルノド氏曰く」以下の波線部がアーノルドのワーズワース論の最も重要な部分であることは諸家の指摘するところである。該当する原文は次のとおりである。

It is important, therefore, to hold fast to this: that poetry is at bottom a criticism of life; that the greatness of a poet lies in his powerful and beautiful application of ideas to life, — to the question: How to live. ('Preface' in *Poems of Wordsworth*, chosen and edited by Matthew Arnold, Macmillan, 1910, p.xvi)

原文の "how to live" は蘇峰によって「人間が如何にして生活す可きや」と訳されている。そして、「如何にして生活す可きや」についての「観念」を「適用」してこそ詩人は「偉大」だとアーノルドは言うのだ、と蘇峰は述べている。

独歩の場合、"how to live" に関する言及は、「田家文学とは何ぞ」のそれ以外には、この時期の明治二十五年九月二十二日付田村三治宛書簡にも見られる。箇条書きの断想風の体裁を取るこの手紙は、田村の卒業を慶賀するものであるが、独歩自身の感懐を交えつつ、親友に人生の旅立ちの心構えの用意を促がすところに注意があり、その中には次のような一節がみえる。

○ 如何に生く可き乎 (how to live) 之れ最初の問題にして最後の問題なり。元とより肉体的の意味にあらず
道徳的の意味なり (後略)。

(全集第五巻、二五二頁。書簡番号二〇)

「如何に生く可き乎」という日本語訳のあとに原文の "how to live" が括弧で括った形で続いている。この書簡を念頭に入れると、「田家文学とは何ぞ」に使われている「人

問は如何に生活す可きか」という表現は、あるいは蘇峰の「新日本の詩人」を意識し、それをなぞらえたもののではないかと推測される。

だが、「如何にして生活す可きや」と云ふ問題に就て、最も力あり、最も美妙なる觀念を適用するに存す（傍点は引用者）との蘇峰の言い方に対して、独歩は「人間は如何に生活す可きか（how to live）てふ問題に付て感得したる理想（傍点は引用者）」と書いてあるように、別に「理想」という言葉を用いている。

アーノルドの原文に照らし合わせると、蘇峰の言う「觀念」が原文の *ideas* にあたることがわかる。明治二十年代、アーノルドの詩論が日本に紹介され、その際に、*ideas* に関して、「觀念」のほかに、「思想」⁽¹⁵⁾、「意想」⁽¹⁶⁾など、論者によって訳語にばらつきがある。蘇峰自身も「新日本の詩人」から約二年後に発表された「帰省を読む」（『国民之友』明23・7・13）において、

詩若し理想を人間の生活に応用する者ならば、此小冊子は即ち詩なり、詩若し人間の生活を批評する者ならば、此小冊子は即ち詩なり

と、「理想」という語をあてているのである。

ちなみに、後になるが、人生相渉論争のさなかの明治二十六年五月、透谷は『文学界』五号に「人生の意義」と題する短文を載せ、論敵山路愛山との立脚点の相違を整理している。そこで、彼は前掲のアーノルドの言葉を援用して「理想といふものを人生に適用する（傍点は引用者）」と訳し、この主張が彼の批評精神に確固たる拠点を与えた旨を述べた。⁽¹⁷⁾

さて、ここで当然問題となるのは、「田家文学とは何ぞ」にあって、独歩が *how to live* の訳を、蘇峰「新日本の詩人」のそれになぞらえたものを使ったにもかかわらず、同じ文中の「觀念」の語を避け、あえて「理想」という言い方を取ったのはなぜなのか、という点である。一つには、論の中盤に繰り広げられた没理想論争への批判がそれに關係しているものと考えられる。「没理想論」に真正面から挑み、反論のスタンスをより鮮明に打ち出すための戦略が、独歩に「理想」という言葉を選ばせたかと思われるのである。同様の趣向のストラテジーがほかにも見られる事実も、こうした推測を可能にしている。「同胞人類を真理と善徳に導く可き使命を有する者」という叙述がそれである。前掲「新日本の詩人」の引用文の少し前のところに、「詩人」

の持つべき「思想なるもの」として、蘇峰は「真理と道徳と美妙とを一貫したる高尚なる観念」を挙げ、次のように語っている。

故に知る可し、我邦に於て古より詩人を生ぜざりし所以、而して現今に於ても生ぜざる所以、敢て理由なきにあらず。即ち彼の詩人なるものにして宗教の観念、道義の観念、真理の観念、真理と善徳と美妙とを一貫したる高尚なる観念なきか為めなることを、蓋し詩の思想なるものは、此等の観念の優悠涵泳して自然に化成したるものに外かならず、

翌年、「文学者の目的は人を樂ましむるにある乎」（『国民之友』明22・1・22）において、蘇峰は文学者の当為に触れつつ、「真理と、善徳と、美妙」に再度言及していた。この文章に関しては、「民友記者徳富猪一郎氏」において、独歩は「彼等は自ら世の豫言者、説教者、教師たる事を忘る可からず。彼等が主観的に有する目的は人を樂ましむるにあらずして、人間社会に立ちて真理と善徳と美妙とを一貫したる高尚なる博大なる真摯なる観念の観察者たり、説明者たるにありとせざる可からず」と、その議論の最も重要な

部分を引用している。

如上のことを考えれば、「田家文学とは何ぞ」に見られる「真理と善徳」への言及には蘇峰の文学論への意識を見出してよいだろう。ただ、「真理と、善徳と、美妙」をワンセットに扱う蘇峰の論法に対し、「田家文学とは何ぞ」において、独歩の筆は「真理と善徳」の言及のみにとどまっている。「審美論」の権威主義の濫用を非難する文脈としてはけだし当然の筆法といえるのかもしれない。

以上見てきたように、内容の一致から、「人間は如何に生活す可きか（how to live）てふ問題に付て感得したる理想」との独歩の言は、アーノルドの“ideas to life—to the question: how to live”を連想させ、一見、アーノルドの言葉そのものを翻訳したかのように思わせるが、しかし、措辞の上に目を注ぐと、それは蘇峰の關係文学論を敷衍したものであることがうかがい知れる。

この事実を把握しなくては「田家文学とは何ぞ」の執筆の内的意味は汲みあげられないであろう。これに関連して、本章の冒頭に「田家文学とは何ぞ」から引いた二つの引用文から割り出したもう一つの共通語である「同胞人類」をあわせて見てみることにしよう。

「同胞人類を教へん事を以て任じたる田家詩人」とあるように、「同胞人類」を教え導くという点においてワーズワース的な文学者像が理想とされることになる。そしてこれもまた蘇峰の文学論に似た考え方である点が興味を引くのである。

「新日本の詩人」(『国民之友』)において、蘇峰は開口一番、「詩人は実に斯くの如き者なり、彼は宇宙の美妙を吸収して、之れを同胞の人類に分配するものなり、宇宙の秘密を穿鑿して、之れを同胞の人類に説明するものなり、」と述べている。「宇宙」と「天」の言葉遣いこそ違え、「天より感得したる理想を據べて、同胞人類を教へん事」(『田家文学とは何ぞ』)と書かれている如く、同様の位置関係は独歩にも共有されているのである。

もともと、それ以上に、「同胞人類」は蘇峰の中で特別の響きを持つ極めて重要な言葉であることを見のがしてはならない。そのことは、たとえば彼の筆になる「平民の詩人」からもうかがわれる。アメリカの詩人ホイットチアル (John Greenleaf Whittier, 1807—1892) を追悼し、その業績の顕彰を旨とする短文であるが、そこで蘇峰はホイットチアルを「漫

に『蒲桃美酒夜光杯』を吟じて豪興に誇り、『一路寒山萬木中』を詠じて、幽玄に矜る」ような詩人とは対蹠的な存在であると捉え、彼は「実に平民の詩人なり。彼は実に無辺なる人間同胞の福音者なり。彼は宏恢なる社会の観念者なり。彼は靈敏なる人情の鼓吹者なり(傍線は引用者)」と賛辞を言い連ねている。一方で、「世幸に自家の哀涙を掬して、同胞の爲めに一滴を濺ぐものあるか」と、「病客」⁽¹⁸⁾ 詩人を痛烈に難詰している。真の詩人は常に「同胞」、「人類」を念頭に置き、人類に対する深い同情をもって歌わざるをえない、という蘇峰の立場が色濃く現れているのである。その発想が蘇峰のいわゆる平民主義の立場に連なるものであることは言うまでもない。

むろん、詩の領分は「風雲月露」の「自然界」の「咏物」、あるいは「幽玄」⁽²⁰⁾、「豪興」の情趣の追求のみに限らず、真正の詩人は「同胞人類」に目をむけ、「眼前」の「活題目」⁽²¹⁾ (『Love had he found in huts where poor men live、賤か伏屋に、彼は愛を見出しぬ』) を掴まえて謳歌すべきである、という蘇峰の趣旨への共感と正当な理解が基底にあるからこそ、理想的詩人・文学者の姿の根本に「同胞人類」への眼差しを据える独歩の立論が可能になったわけである。

「田家文学とは何ぞ」に、蘇峰が「平民の詩人」に引い

ていたのと同じワーズワースの詩句が用いられていることが秦行正によって指摘されていたことは前述したとおりである。独歩がそれを含む一節をもってワーズワースの詩眼の所在を説いたうえ、更にワーズワースを「同胞人類を教へん事を以て任じたる田家詩人」と位置づけたところを見ると、「平民の詩人」（明25・10・23）と時を接して発表されている「田家文学とは何ぞ」は、詩句からの示唆のみならず、内容、思想の上でも蘇峰の平民主義詩人論に響応する趣があると言えよう。

もつとも、この「同胞人類」への関心は、田舎、自然を詩材とするのが常である独歩の作品に照らしてもわかるように、旧来の田園詩、自然吟詠文学とは一線を画す近代的性格を持つものでもあることをここでつけくわえておきたい。

かくして「理想」や「同胞人類」の言葉を手がかりに、「田家文学とは何ぞ」に示されている独歩のワーズワース観およびそこから発展してきた理想的文学者像について考えてみたが、これらの表出を追うと、蘇峰の文学関係諸論の広大なコンテキストが立ち現れてくる。内容、用語に重なる部分が多いことは、蘇峰の考え方や措辞そのものまでもが独歩の中に奥深く浸透し、彼の文学観の基礎をなしている

ことを物語っている。このことは蘇峰の言説が従来伝記的資料によって推測されていた以上に、独歩の文学意識の形成に大きな影響を及ぼしていることをうかがわせるのである。両者の交渉の検討はこれまで以上に重要視されねばならない。

そもそも、独歩が湖処子のいう田家文学「小冠」論に反論を加える際に持ち出した「詩眼の高下」という評価軸も蘇峰の言をなぞっているものと考えられる。そのことは例えば「帰省を読む」の次の一節によって知り得る。

詩の事たる、事物を其儘に写すに非ず、自己の眼球に反映せしめて其影射したる物をば写すなり、而して詩人の妙は、其反映せしむる着眼の極めて真なると、高とに在り、吾人は此書の着眼極めて高しと言ふを得ず、然れども其清く、温に、且真なるは、吾人敢て之を許すを吝まざるなり、
(傍線は引用者)

詩人は「自己の眼球」の「反映」・「影射」作用を経過して「物」を「写」さなければならぬ、と蘇峰は唱えている。「事物を其儘に写す」単純な写実論に反対する立場に立脚する蘇峰の面目が躍如としている。「理想」の「影射」

としての「詩」の像が要請されることは注意しておいてよいであろう。とすれば当然のことながら、「着眼」の（真偽）、「高下」は、詩の出来栄を左右する意味から気になるところである。こうした視座から蘇峰は『帰省』（宮崎湖処子著、明23・6 民友社）を評し、その「清」、「温」、「真」の面を高く買いつつも、「着眼極めて高しと言ふを得ず」と評価を留保した。

対して、「若し夫れ、微妙玄通、絶代の詩眼を以てせば、由つて以て高遠なる理想人生の真趣を説明し能はずとせんや」とあるように、独歩の湖処子批判の眼目はここでもやはり同じ「詩眼」のありかたに置かれている。ただ、「然れども」の逆接を用いて「清」「温」「真」の賞揚に向う蘇峰の擁護的な論調に対し、独歩は蘇峰の観点に沿いつつも、あえて手放しの称賛でないところだけを際立たせ、それを自家の考える田家文人の理想像を浮き彫りにするための装置として利用したのである。

以上瞥見してきたように、「理想」をもって「同胞人類」を「教」えるといった理想的文学者像の提出、およびそれに連動する詩眼の高下の評価軸といった点から考え、「田家文学とは何ぞ」に繰り返しられた文学論が蘇峰の言説に全面的に依拠し、それを祖述するところから成り立つことは

もはや繰り返すまでもない²³。これは『国民之友』を愛読し、蘇峰に親炙した流れからしてうなずけるところでもある。しかし、だからと言って、決して二番煎じに終っているわけではない。蘇峰の文章の濃密な閲読や自らの内面化による洗練を経て、更には先輩の湖処子、そして文壇の重鎮の逍遙・鷗外を標的に想定される「没理想論」「審美論」といった流行の二大潮流に対して批判の眼を向け、同時代の文学のありかたを問題化することによって、「理想」と「同胞人類」を両輪とする理想的文学者像、さらに言えば、文学の〈主題〉と〈対象〉の把握が、独歩の中に次第に明晰なものになって行ったことがこの際重要なのである。そこにこそ「田家文学とは何ぞ」一編の真の価値があるのであり、それが独歩の創作上の素材と観点、および創作態度のおおよそを決定することになったのである。

やがてアーノルドのワーズワース論をはじめとする蘇峰の文学論の礎石となる英学に直接に触れることによって、これらは彼ならではの文学的・思想的課題へと発展・深化してゆくのだが、「田家文学とは何ぞ」には既に、蘇峰をのりこえて、独自の道を歩み出す端緒がうかがわれるのである。

四

アーノルドの詩論が、徳富蘇峰ら西洋文学に対して当時としてはかなり高い関心と深い知識をもつオピニオン・リーダー達によって、明治二十年代前半に日本に紹介されていたことは先に述べた。蘇峰の文学論は全体的に、吉田正信の指摘しているように、「示唆の段階でとどまっていた」、⁽²⁴⁾「実践的な問題は作家の側の問題として残されて」いる点にその特徴がある。同様の評言は彼のアーノルド詩論の紹介にもあてはまる。文芸批評家であると同時に詩の制作に直に携わる詩人でもあるアーノルドは、詩作の実践や応用に関わる発言も少なからずなされていたのだが、蘇峰らによって日本に紹介された際に、その方面への言及は往々にしてなござりにされていた。

そもそも、先に掲げた、アーノルドのワーズワース論を引いた「新日本の詩人」の一節に、すでに中皓に指摘されたように、明らかな誤訳が存在している。問題の文言を抄出しておく。

詩人の偉大なるは、人生の生活に就て、即ち如何にして生活す可きやと云ふ問題に就て、最も力あり、最も

美妙なる観念を適用するに存すと、

この原文は次のとおりである。

that the greatness of a poet lies in his powerful and beautiful application of ideas to life,——to the question: How to live. (p.xvi)

application、の直前に「powerful and beautiful」という二つの形容詞が冠されている。位置関係から見れば、蘇峰が理解していたような「ideas」ではなく、application、を修飾するために配されたものと考えられる。原文の文法に従えば、正しくは、中皓の言うように、「観念を如何に力強く、また美しく適用するかに存する」と訳されねばならない。つまり、how to liveについての人生の深意の探索を伴う「人生の批評」としての詩の内実を強調すると同時に、詩美の法則をも無視してはならない、というのがアーノルドの立場なのである。⁽²⁵⁾

アーノルドがこの意識を最も明確に発表したのは、のちの論文「the study of poetry」⁽²⁶⁾においてである。⁽²⁷⁾ 関連する叙述を見てみよう。

詩においては、人生の批評として、このような批評のために詩的眞実と詩的美の法則の定める条件はあるのだが（後略）。（成田成寿訳注『英米文芸論双書7 マシユー・アーノルド「詩の研究」』（昭48・9 研究社出版）七頁）

最高の詩的成功のために必要なのは、人生にたいする觀念の力強い適用以上のものである。その適用の条件は、詩的眞理と詩的美の法則の決定するものでなければならぬ。（同右、六一頁）

ちなみに、やや後になるが、透谷は明治二十六年四月の『評論』第一号に掲載の「日本文学史骨第一回 快樂と実用 明治文学管見の一」において、もっぱら「人生の批評としての詩」として解釈される論調に対して批判を加え、アーノルド理解の是正を促がした。

マシユー・アーノルドは「人生の批評としての詩に於ては、詩の理、詩的美の定法に応ふかぎりは、人生を慰め、人生を保つことを得るなり」と云へり。

文学が一方に於て、人生を批評するものなることは、

余も之を疑はず。然れども、アーノルドの言ふ如く、人生の批評としての詩は又た詩の理と詩的美とを兼ねざるべからず。吾人文学を研究するものは、単に人生の批評のみを事とせずして、詩の理と詩的美とをも究むるにあらざれば不可なるべし。

これは人生相渉論争の中に書かれたもので、「単に人生の批評のみを事と」する、と透谷が難ずるとき、だれのことを念頭に置いていたかは想像に難くないだろう。

ところで、蘇峰に適用への思考が全くなされていなかったということではない。「新日本の詩人」の論末に「美妙なる觀念をば、人の胸臆に潜みたる最後の琴線に触る程に深切に此の問題に適用して、而して之を解釈するなり」との文言が見える。同様の趣旨は冒頭部で次のような形でも書かれている。「自から美妙の觀念を以て、天地萬有より動かされて、更に美妙の觀念を以て、人間社会を動かす者なり、而して其動かすや、皮相に非ずして、人間胸臆最後の琴線に触るゝものなり」と。

もつとも、「人間胸臆最後の琴線に触る」ことは、蘇峰の文学観の重要なポイントの一つでもある。「文学者の目的は人を樂ましむるにある乎」においても、蘇峰はこの点に

触れ、次のような見解を示している。

吾人は固より謂ふ文学者の客観的の目的は、人を樂し
ましむるにありとして、毫も妨なし、但た其主観的の
目的に於ては——自ら文学者として立つ所の道義的の
職分に於ては——之を以て満足すべきものにあらず。
彼等は自ら世の預言者、説教者、教師たることを忘る
べからず。(中略)文学者(中略)、最も幽奥なる哲学
家の尺度に於てすら達する能はざる人心最後の琴線に
触れて快感を与ふるなり (傍線は引用者)

文学者の世にある務めを「預言者、説教者、教師」に置
いた上で、文学者は「最も幽奥なる哲學家の尺度に於てす
ら達する能はざる人心最後の琴線に触れて快感」を与える
のだと蘇峰は言う。「人心最後の琴線に触れ」るところに
おいて、文学者は哲学者よりも上位にあると蘇峰は暗に示
唆するのである。蘇峰が考える文学者の文学者たる所以も、
まさにこの点に存在するはずである。

「人間胸臆」あるいは「人心」の「最後の琴線に触れ
る」という叙述に〈共感〉の喚起への強い志向が読み取れる
のだが、それを達成させるために如何なる手段を講ずるべ

きかについては、「新日本の詩人」に見られる「美妙なる観
念をば人の胸臆に潜みたる最後の琴線に触る程に深切に此
の問題に適用(傍線は引用者)」するという漠然とした言い
方以外には言及が見当たらないのである。

晩年、蘇峰は『蘇峰自伝』(昭10・9 中央公論社)におい
て文章作法に触れ、自らの奉じた「金科玉條」が「達意」
であると告白し、「正しく」そして「強く」伝達することに
よって「他」の「感情を動かす」文章法を開示していた。
ここには「大衆を相手」とするジャーナリストらしい文章
意識が歴然としている。「新日本の詩人」に書かれている「深
切に此の問題に適用(傍線は引用者)」する⁽³⁰⁾という一文にも
おそらく同様の意識が働いていたのだろう。もつとも、一
家の見識を鼓吹する時評類ならば、力強い筆調は昂揚感を
そそり立てることで大衆に呼びかける効果があるかもしれ
ないが、文学作品において調子だけが高ぶると、共感の喚
起どころか、場合によっては空疎の感に陥りかねない危険
をも孕んでしまう。ここに言論人蘇峰の文学意識の限界が
あると言わざるをえない。

対して、「田家文学とは何ぞ」においては、短い言及なが
ら、「詩情を以て詩文に現はし」と独歩ははっきりと書きつ
け、“how to live”について感得した「理想」を提出する方

法が示されている。漠然とではあっても、「詩情」に着眼したことは大きな意味を持つていると思われる。「闇にも歎びあり、光にも悲あり麥藁帽の廂を傾けて、彼方の丘、此方の林を望めば、まじく照る日に輝いて眩ゆきばかりの景色。自分は思はず泣いた」と、情動を熱い涙で表現し、それをもつて一篇を締めくくった「画の悲み」（『青年界』明35・8）もさることながら、「其夜、淡い霞のやうに僕的心を包んだ一片の哀情は年と共に濃くなつて、今はたゞ其時の僕の心持を思ひ起してさへ堪え難い、深い、静かな、やる瀬のない悲哀を覚えるのである」という、哀情がみなぎる「少年の悲哀」（『小天地』明35・8）の結末など、後年、独歩の筆になる作品の数々を考慮に入れると、読者の心に訴え、感動の余韻に浸らせる豊かな詩情を持ち味とする文学に大成すべき予感を感じさせる一言であつたと言えよう。

蘇峰の文学論を主体的に摂取しつつ、さらに彼に見過ごされていたこと、すなわち、文学創造の実践にかかわる問題にも目をつけて、「主題」と「表現」、換言すれば、問題の探求と文学の方法との両面で思索を深める独歩の姿がうかがえる。本人が意識したか否かはさておき、文学者への道に重要な一歩が踏み出されたのである。

五

如上の如く、「田家文学とは何ぞ」が実証的に示してくれるように、独歩は蘇峰の文章を通じて文学の輪郭を把握していった形跡が認められる。たとえ漠然としたものであつても、蘇峰によつて植えられた文学の捉えかたが彼の中で綜合され、血肉化して行くうちに、ワーズワースを代表とする「田家文学」を一つの理想的な文学モデルとして捕捉するようになったのである。それをよりどころにして先輩湖処子の田家詩人「小冠」論のみならず、あわせて没理想論争をも射程に入れ、批判を加えた上で、「How to live」に關連して「天より感得したる理想」を「詩情」をもつて表現し、「同胞人類」を教える、という確固たる「問題意識」と文学の「主題」、「方法」、「対象」の自覚に裏づけられた理想的な文学者像の青写真が独歩の中で次第に明晰になりつつあつたことは前述したとおりである。後年の独歩文学の展開に照らし合わせて考えれば、独歩が「田家文学とは何ぞ」をもつて、蘇峰の文学論の影響の内面化に重要な一歩を進め、ある意味で、それを自己の所有とする端緒を開いたと見てもよからう。

独歩と蘇峰との關係については、従来、相反する二通り

の捉え方が存在している。いっぽうは北野昭彦の「民友社の平民主義の影響から自立した独歩が、〈小民〉の人的価値を発見し、明治の〈小民史〉の文学的形象化をめざすに至った必然の経路を説明する鍵が、植村のワーズワス論のこの一節（帝王将相匹夫小人も詩の題目として区別がないと述べた一節——引用者注）に伏在していた⁽³³⁾」との見解が典型的であるように、民友社の平民主義から自立した位置に、独歩の文学の源流を設定する意見である。他方は山田博光「独歩と民友社」⁽³⁴⁾や「独歩文学の位置づけ」⁽³⁵⁾を代表とする、両者間の交渉を積極的に追尋・評価する一連の論考である。

なるほど、「自然への愛は独歩に特有なものでなく、民友社系の文学者にほぼ共通するものである」⁽³⁶⁾、「独歩の小民は松原や愛山の口にする貧民とは異なるけれども明治社会の敗残者、落後者である点は共通している」⁽³⁷⁾と山田がいみじくも指摘しているように、独歩文学と民友社文学との間には相似通ったところが少なからず見出せるのである。独歩文学の特質を、蘇峰を先頭とする民友社との交渉に遡り、その発生の源ではつきりと捉えようとする山田の所論は首肯できる。ただし、独歩の言説に立ち入り、彼が民友社から、特になかでも深く影響を受けたはずの蘇峰から何を、そして内面化を重ねる中で、何を自己のものとして抽出し

たか、を具体的に示す資料が提示されていないかつたため、氏の議論はやや直観的な把握に留まっているとの印象が否めない。この意味では、「田家文学とは何ぞ」一篇を精読することは、独歩の文学意識の形成の軌跡を蘇峰との具体的な関係の中に跡付け、彼の文学的課題の一端を知るうえで、極めて重要な意味を持っていると思われるのである。

* 独歩の引用本文は『定本国木田独歩全集』（昭和五十三年増訂版学習研究社）に従った。旧字は適宜常用漢字に改めた。なお蘇峰の関係論文の引用については原則として初出に拠り、傍線、圏点は省略した。

【注】

(1) 「水谷眞雄日誌」（学習研究社版『定本国木田独歩全集』第十卷所収）六月十日の項に「此の夜国木田が着京せしを報せり、一昨日着京と」（四四四頁）とあることから、独歩の再度の上京は二十五年六月八日であることがわかる。

(2) 塩田良平「国木田独歩に及ぼしたワーズワスの影響（一）」（『明治大正文学研究』昭31・1）、七九頁。

(3) 塩田良平「国木田独歩に及ぼしたワーズワスの影響（二）」（『明

治大正文学研究』昭30・9)、三頁。

(4) 秦行正「文学者独歩の出發——ワーズワスの受容から(小民)

文学の創造へ——」(『福岡大学人文論叢』94・9)。

(5) 山田博光「独歩が読んだワーズワス詩集のテキストは何か」

(初出「ワーズワス詩集と国木田独歩」(『比較文学』81・12)、

同氏著「北村透谷と国木田独歩——比較文学的研究——」(平

2・12 近代文芸社) 所収)、引用は後者による。四一頁。

(6) 秦行正「文学者独歩の出發——ワーズワスの受容から(小民)

文学の創造へ——」(前掲)、九〇五頁。

(7) 蘇峰によるワーズワスのこの詩句の引用について、山田

博光が「独歩と民友社」(初出『文学』(昭40・1)、のち『国

木田独歩論考』所収(昭53・9 創世記))においても触れて

いる。蘇峰のこの講演を明治二十五年のものと判断する氏

は、同じ頃に独歩がワーズワス詩集を入手した事実を微

して、詩集の入手は蘇峰の講演の影響によるものと推測し

ている。ちなみに、同様の明治二十五年という認識は、滝

藤満義(『シンセリティー論I——『欺かざるの記』起筆前

後——」(『国木田独歩論』(86・5 塙書房)、注(13))に

も共有されている。山田の論に明治二十五年のものと断ず

る根拠は明記されていないが、詩句の引用の後に括弧付き

で「『文学断片』所収」と記していることから、おそらく、

民友社刊国民叢書五冊『文学断片』(明27・3)の目次の「新

日本の詩人」の項目下にある、「廿五年九月於青年文学会講

演」という注記を念頭に置いた判断であろうと推察される。

ただし、本論の本文でも述べたように、明治二十四年三月

の『青年文学雑誌』第一号にすでにそれを速記したものの

全文掲載が見られる。明治二十五年九月、水谷眞雄の尽力

(『国木田独歩全集』第十卷所収「水谷眞雄日記」(四四六頁)

を参照)により、青年文学会例会で行なわれた講演を集め

た小冊子が青年文学出版社より刊行された事実を鑑み、『文

学断片』の注記はあるいは講演集の出版日付を勘違いした

ものであろうか。

(8) 中国で最も早いワーズワスに関する言及は、一九〇〇年

三月一日の『清議報』に発表された梁啓超の「慧観」の「無

名之野花、田夫刈之、牧童踏之、而寓尔哲翁士于此中見造

化之微妙焉」という一句であるとされている(向玲玲「国

内華茲華斯比較研究述評」(『浙江旅遊職業学院学报』09・

6)。「慧観」は蘇峰の「観察」を下敷きにしたものである

ことは二つの文章を読み比べれば分かる。無論、そこでの

ワーズワスの詩句への言及も蘇峰からの孫引きにほかな

らない。後年、蘇峰は自伝の中で「この赤表紙の小冊子(『国

民叢書』——引用者注)は、当時最も読まれ、その中には

特に支那留学生などにも愛読されたものがあつたことは、当時の留学生であり、後には支那政界に雄飛したる人々より、親しく予に対する感謝の言葉を聴いたことによつても判る。而してその或者は支那文に翻訳せられた『蘇峰自伝』(昭10・9 中央公論社)、五八四頁)と回想している。それらの留学生の中の一人に梁啓超もいたのである。いずれにせよ、蘇峰によるワーズワース紹介が梁啓超の翻訳を介して中国におけるワーズワース紹介・研究の嚆矢となつた事実は興味深いものがある。

(9) この引用には誤植があるようである。モーレー本にも、アールド本にも、当該箇所は「the meanest flower that blows can give/Thought that do often lie too deep tears」となつてゐる。

(10) ちなみに、この句は『女学雑誌』二二四号(明23・8・2)の「かすみ」の署名による「深夜の星こゝろの歌」にも、
To me the meanest flower that blow can give thoughts that do often lie too deep for tears. と見える。

(11) たとえば、独歩全集第五巻所収の塩田良平の解題に、独歩が「第二回例会」にも「出席して会務に熱心だつた」(六三一頁)とある。

(12) この引用文について、秦行正は「文学者独歩の出発——ワ

ーズワースの受容から(小民)文学の創造へ——」(前掲)において、これをモーレーの言葉として捉えている(九〇〇頁)。「田家文学とは何ぞ」の独歩の原文に確かに「ミヤース氏はウォルズウォースを以て、「プラトー、ダンテ、ウォルズウォース」と連唱す可き者なりと説けりとぞ、然かるにモーレー氏は之れ余りに賞賛に過ぎたる者となせり、吾人は其の当否を知らず、只だ渠は悲劇の為に悲劇を作らず、小説の為に小説を作らず、詩歌の為に詩歌を作らず、美術の名の為に美術を作らず只だ己れの天より感得したる理想を據べて、同胞人類を教へん事を以て任じたる田家詩人たるを知るのみ」とあるように、先頭にモーレーの名が挙げられている。だが、典拠と言われるモーレー編『ワーズワース全詩集』の序文とつきあわせてみればわかるように、モーレーの言葉は「之れ余りに賞賛に過ぎたる者となせり」(厳密に言えば、正しくはモーレー自らの言葉なのではなく、Swimburneの言葉をモーレーが紹介したものである。)とまで続くのである。「吾人は其の当否を知らず」以下は独歩による自家の主張の開陳と見るべきである。

(13) 傍線部について秦行正は「文学者独歩の出発——ワーズワースの受容から(小民)文学の創造へ——」(前掲)で注を付け、それが「アールドの「ワーズワース」論を踏まえた所論で

あろう」(九一三頁)とし、更に「because moral ideas are really so main a part of human life. The question, how to live, is itself a moral idea; and it is the question which most interests every man, and with which, in some way or other, he is perpetually occupied.」をそれに相当する原文として挙げている。ところが、本文で分析したように、傍線部分は蘇峰の文学論を敷衍したものであり、アーノルドの所論からの直接の引用ではないと考えられる。

(14) 中略「民友社の詩歌論——『国民之友』を中心として——」(同志社大学人文科学研究所編『民友社の研究』(昭52・12 雄山閣)。佐藤善也「人生相渉論争期以前の北村透谷とマシュー・アーノルド」(『透谷、操山とマシュー・アーノルド』(97・7 近代文芸社))。

(15) その用例には、例えば、「マシウ、アルノルド曰く、詩は生命の批評なり、その目的は高尚なる思想を人生に適用せしむるに在りと」(植村正久「詩人論」(『日本評論』(明23・5・10)、傍線は引用者)、あるいは「詩は所詮人生の批判なり詩人の大は人生問題、即ち「如何に生存すべきか」といふ問題に対して其の思想を強盛に且優美に應用する処に存す」(鄭限生義訳「詩論雜纂」(『早稲田文学』(明26・3・25)、傍線は引用者)という箇所がある。

(16) 「マシウ、アーノルド曰く、詩は到底生涯の批評の如し、詩の切要なる所以は高速高大なる思想を实社会に應用し人類如何に生存すべきやの大問題に考及するの一事にありと」(『詩仙』(上)「詩人とは何如なるものぞ」(『女学雑誌』(明23・7・12)、傍線は引用者)。

(17) 明治二十五年前後は、写実的小説が下火になり、代わりに「理想」という言葉が取り沙汰されるようになっていた。そのことは、例えば、第一次『早稲田文学』第二十六号(明25・10・30)に掲載の「文界彙報小説界」の「案ずるに今の俗に写実的と称する小説の多数は既に読者に厭かれたりかゝるがゆゑに世人口を開けば則ち曰はく今の小説は繊弱なり狭小なり徒に男女の恋愛を写すに過ぎずと且之れに種々の注文を附したり曰はく宜しく社会問題を材料として人智を啓き風教を益すべし本月一日「改進」曰はく宇宙、人生等に関する自己の理想を發揮すべし本月廿三日「国民」三沢漁郎曰はく旧理想に安せず新理想を描写することを力むべし「青年文学」十二号峰夏樹と最近『国民之友』に於て透谷子他界に対する観念の我が古来の文界に乏しき由を詳論したる末には「写実派と理想派との区別漸く立たんとする今日の文壇に理想詩人の万人に願求せられながら出現することの晩きも蓋し他界に対する高傑なる観念の作家に

乏しきに因るならん」と之れに因りて観れば理想的詩歌小説を求むる声漸く高からんとす」(二二頁) という短文からも窺い知れる。透谷の言葉として紹介された部分の文面からも分かるように、透谷の言う「理想」は「他界」への願望の色彩がきわめて濃厚なものである。この点において、独歩は同じくアーノルドからの影響を受けつつも、彼の言う「理想」が常に「同胞人類」を教え導く「人間の教師」としての役目とリンクしているため、透谷と位相を大きく異にしていることを付け加えておきたい。

(18) 「窮して巧なりとは、詩人の自から慰むる警語なれども、彼等自から窮して自家の窮を傷み、而して愁思乱れて麻の如く、此に於て凝りて詩となる也。之を例せば病客が熱に侵されて夢幻境に入るが如く、日月の外を奔り、宇宙の極を環るも、要するに是れ発熱の作用のみ」と蘇峰は書いている。

(19) 「詩人の題目」(『国民之友』明25・11・3)。

(20) 「平民の詩人」(『国民新聞』明25・10・23)。

(21) 同右。

(22) これに関連して、たとえば、大江逸の筆名で書かれた「浮雲(二篇)の漫評」(『国民之友』明21・2)の中で、蘇峰はマシュー・アーノルドの言葉を引き合いに出し、「小説なるものは実際よりも一層美妙に描き出さざる可らず」と主

張している。また、後年の「熱海日より(番外)」(明26・3・19)においても「マシュー・アルノルド申す様批評家の本色は世間に存する最善最美の思想を捉へ此に明光を与へて世間に普及せしむるにありと(傍線は引用者)」と語っている。アーノルド研究者の矢野峰人は、アーノルドの詩論の最も重要な鍵語 *criticism of life*、*criticism of life*、*application of ideas to life*、*criticism of life* がすなわちその内実の解説にあたるものであると述べ、「詩人が題材に対し彼自身の人生観を以て臨み、いはばその光の下に照らされたる対象を描き出すといふ事は、畢竟彼が対象を批評する事に他ならないからである」、「詩人が対象の単なる外相の描写に満足せず、皮下深く透察した結果たる作品は、自ら彼の人生観を通過せるもの、即ち、彼によつて「批評せられたる人生」に外ならない、此の意味に於て、文芸または詩は「人生の批評」である」(『近英文藝批評史』(昭18 全国書房)、「マシュー・アーノルド」三三―三四頁)と説明している。蘇峰の立場は、彼自ら「マシュー・アルノルド申す様」と断つてもいるようにアーノルドの詩論に対してある程度の正当な理解の上に立っているものであることが明白である。

(23) 本文では言及し得なかったが、悲劇論、沙翁崇拜の論調および審美論を観念的に振りかざす現象に対して批判を加え

る際に、独歩は「縫箔の文学」という語を以てそれらを擁護している。これもまた蘇峰の文学論を意識したものにほかならなかったことは、「文学者の目的は人を楽ましむるにある乎」(『国民之友』明22・1)の「凡そ世の技芸家の絶妙の作なるものは、未だ必ずしも縫箔師の縫箔に於けるか如く、唯た其の指端のみに由て出て来りたるものにあらず。特に文学上の作の如きに至つては、最も甚たしとなすなり」という一節に徴して見ても明らかである。

(24) 吉田正信「徳富蘇峰の文学評論」(新日本古典文学大系 明治編26『キリスト者評論集』02・12岩波書店)、五八二頁。

(25) 中皓「民友社の詩歌論——『国民之友』を中心として——」(前掲)二七〇頁。

(26) この点については矢野峰人『近英文藝批評史』(前掲)「マシュー・アーノルド」の項や井上正名「マシュー・アーノルドの詩の定義と批判の態度」(『大谷学報』昭45・3・31)、佐藤善也「人生相渉論争期の北村透谷とマシュー・アーノルド」(『透谷・操山とマシュー・アーノルド』(97・7近代文芸社))などに詳しい。

(27) 「英文学史上代表的な詩論の古典の一つ」(渡辺栄太郎「マシュー・アーノルドの『詩論』及び『詩歌の研究』」(『大東文化大学紀要(人文科学)』平15・3)、四〇一頁)とみな

されるこの論文は詩歌一般について論じたもので、積年の思考を書き纏めたアーノルドの晩年の集大成である。初め Thomas Humphry Ward のイギリス詩人集 (*The English Poets: selections with critical introductions/ by various writers; and a general introduction by Matthew Arnold*, edited by Thomas Humphry Ward, Macmillan, 1880) の総序として書かれ、のちアーノルドの代表的な論文集 *Essays in Criticism, Second Series* (Macmillan, 1888) の巻頭に収められ、全体の序文の趣きもある。

(28) このような認識はほかにバイロン論(例えば、「人生に関する深い批評によって、人生自体を、詩的真実と美の法則という不可分な関係として表わす、少数の最高の巨匠達は別としても、この種の不均衡は、すべての詩人の中に、認めざるを得ない」(荒牧鉄雄、森田正実訳注『アーノルド批評論集』(昭62・11 大学書林) 一五九頁)、「詩における人生批評は詩的真実、詩的美の、法則にも適合していなければならぬ。真実や、書物の重要性、話法の巧妙さや、完璧性は、最も優れた詩の中で示されているように、詩的真実と詩的美の法則と合致した人生批評を構成するものである」(一六〇頁)等の発言にもうかがわれる。

(29) この点については、人生相渉論争期における北村透谷の愛

山・蘇峰批判の位相をマシユール・アーノルドの影響に見出す、佐藤善也「人生相渉論争期の北村透谷とマシユール・アーノルド」(前掲)に詳しい。

(30) もちろん、蘇峰が「深切に」を言う時、アーノルドの「the noble and profound of ideas to life」の「profound」を念頭に置いていたであろうことは前後の文脈に徴して推せられる。

(31) 学習研究社版『定本国木田独歩全集』第二巻、四七二頁。

(32) 同右、四八三頁。

(33) 北野昭彦『宮崎湖処子 国木田独歩の詩と小説』(93・6 和泉書院)「第六章 国木田独歩の〈精神上の大革命〉第二節

植村正久と独歩の文学・思想上の接点——ワーズワス受容と驚異志向における植村の役割——」、一六四頁。

(34) 初出『文学』(昭40・1)、のち同氏著『国木田独歩論考』(昭53・9 創世紀)に所収。

(35) 原題「独歩文学の位置——特にその出発点の問題」(『かりばね』昭38・12)、のち同氏著『国木田独歩論考』(前掲)に所収。

(36) 「独歩文学の位置づけ」。引用は『国木田独歩論考』(前掲)による。三二頁。

(37) 同右、三三頁。